
IS ~インフィニットストラトス~ ORIGINAL GENERATION

牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 〜インフィニットストラトス〜 ORIGINAL GE
NERATION

【Nコード】

N0934Z

【作者名】

牙

【あらすじ】

作者の大好きな、ISとスパロボOGのクロスオーバー作品。舞台はIS世界のほうです。

プロローグ（前書き）

駄文、物語薄いという駄目小説になりそうな妄想全開小説ですが、暇つぶし程度に読んでいただけたら幸いです。

ちなみに、作者はそこまで深く原作を知ってる訳ではないので、原作の面影が無い部分があっても、多少は許してやってください。指摘してもらえれば、直す努力はします。

プロローグ

IS 「インフィニットストラトス」。

既存の兵器、パワードスーツの常識を超えた性能を有するマルチフォーム・スーツ。

それが世間に発表された当時は、スペックこそ高く評価されたものの、開発者が無名で、余りに若すぎる女性ということに加え、女性にしか扱えないという奇妙な欠点から、最初は相手にされず、絵空事で終わっていた。

しかし、ISの評価は、発表から一カ月後に起きた事件により、一変することになる。

「白騎士事件」。

日本を射程内に治める世界各国のミサイル基地全てが一斉にハッキングされ、実に二三四一発ものミサイルが日本に向けて発射されたのである。

世界中の誰もがこの大破壊術を防ぐ手段など持たず、恐怖でパニックに陥っていた日本の危機を救ったのは、純白のISに身を包んだ、一人の女性。

後に、白騎士と称されるようになったそのISは、ミサイルの約半数をその手の大剣で切り落とし、逃がした残り半数のミサイルは、開発途中であった荷電粒子砲を召喚し、薙ぎ払ったのである。

その強烈なインパクトは、発表されたISの性能が本物であることを証明し、世界はISを中心としたミリタリーバランスが構築された。

さらに、この大発明、ISの性能をさらに上げるきっかけとなる

事件が、この白騎士事件の一年後に起こった。

南太平洋のマーケザス諸島沖に、奇妙な隕石が落下した。

宇宙探査用の観測機器や各国のレーダーの全てを掻い潜り、突如大気圏に突入したその隕石は、地表への到着寸前にブレーキを掛けたのである。

結果として被害が少なくなったためそれは良いのだが、明らかに自然のものと思えない挙動を行ったその隕石は「メテオ3」と称され、科学者達によって、研究された。

その調査で分かった事実は驚くべきであり、同時に、再び世界を危機に訪れるかもしれない結果となった。

メテオ3は、地球外知的生命体の手による一種の探査艦だったのである。

地球人類は未だ完全な外宇宙への進出を果たしたとはいえない状況だというのに、彼らは既に銀河系レベルの国家を形成しているということも判明した。

そして、各星系に対して積極的な武力進出を行っているということも。

この事実を受け、調査団の長である、ビアン・ゾルダーク博士は、当時の国連事務総長、現地球圏統一連合の初代大統領であるブライアン・ミッドクリッドに直訴。

種々の調査資料を基に「人類に逃げ場無し」と説き、地球外生命体、通称、「エアロゲイター」に対する矛となる計画、プロジェクトER発動を承認させる。

国連主要各国の協力も秘密裏に取り付けたビアン博士は、彼自身が所長を務めるアメリカのテスラ・ライヒ研究所と、パワードスーツメーカーとして名を馳せたマオ・インダストリーとイスルギ重工との協力体制の下、

メテオ3の解析技術を盛り込んだ新機軸の戦闘用パワードスーツの

開発に着手する。

そうして開発されたのが、第二世代型ISと、戦闘用母艦・スペースノア級と外宇宙探査船を改修・大型化したヒリュウ改。

これらの戦力を整え、ビアン博士率いる機密舞台、「デイベインクルセイダーズ」、通称、DCは、何れ来るエアロゲイターとの戦いに備えたのである。

プロローグ（後書き）

はてさて、どうなることやら。

執筆が遅いので、一話を投稿するのは結構後になりそうです。

第一話 入学、IS学園！（前書き）

えっと、少し謝らなければいけないことが出来ました。

前回のあとがきにて、今回は長くなりそうだから更新が遅れそう
だと言ったのですが、7割がた完成した後「まさかのデータ消失」。

これは驚きました。そして同時に、軽く泣きました。

申し訳ありませんが、書く気が少し失せたので、短いですが、早
めの更新をします。

次回こそはOGキャラに活躍を……

第一話 入学、IS学園！

IS学園。

世界の常識を変えたマルチフォーム・スーツ。IS……その操縦者を育成する、世界唯一の、IS専門養成機関である。

女性しか居ないはずのIS学園の教室。しかし、どんな世界の、どんなものにも例外というのは存在する。

(これは……想像以上にキツイ……)

教室中央の最前列の席で、脂汗を流しながら独りごちる少年。名を、織斑一夏。

何の因果か、秋の統一模試を受けに行っただけがIS学園の先行試験会場に迷い込んでしまい、そこでISを操縦出来る事が発覚。

その後一時的に日本政府の保護下に入り、そのまま半強制的にIS学園に入学させられる羽目になったのだ。

しかし、政府の保護下というのは、ある意味では一夏にとってもありがたいことでもあった。というのも、一夏には両親が居ない中で、政府が学園で生活する上での、主にお金面での不安を解消してくれる、という事実にもつながるからなのだ。

一夏はこの事実を、自分をここまで育ててくれた姉に迷惑をかけるのではないですむ、という点でありがたいとは思っている。しかし、やはりこの状況は予想できなかったらしい。

しかし、この状況も考えても見れば当然である。

乙女の園に数少ない同年代の男性、しかも憧れのお姉様たる戦乙女の実弟なのだ。注目を集めない方がおかしい。

あまりの居心地の悪さに、窓際の席に座る幼馴染へと助けを求める視線を向けてみたが、すぐに視線をそらされる。

(それが6年ぶりに再会した幼馴染に対する態度かよ……いや、もしかして、俺嫌われてるのか?)

一夏はそのまま顔をそらした自身の幼馴染、篠ノ之箒をしばらく見つめながら自身の思考をめぐらすのが、やがてそれが無駄な努力と分かると、今度は「二人目の例外」となる人物へ視線をよせる。

二人目の例外。要するに、一夏以外の男性でのIS操縦者、ということだ。

その男の容姿は整っており、髪先端に金メッシュを施している。彼もまた、女子達の視線を集めているが、頬杖をついてため息を吐くだけで、面倒くさいとしかとらえていないといった感じだ。

一夏はもう一度視線を箒に戻す。しかし、これといった変化もないので、一度ため息を吐いた後、黒板のほうを向いた。

すると、ガラガラと音を立てて、教室左横にあるドアが開く。

入ってきたのは、やや小さめの身長に、緑色の髪、眼鏡をかけた女性。この時間に入ってくるということは、恐らく先生、というよりも、担任なのかもしれない。

その女性は教壇の前に立つとにっこり微笑み、自己紹介を始めた。

「皆さん、入学おめでとうございます。私はこの、IS学園一年一組副担任、山田真耶です。これから一年間、よろしく申し上げますね!」

「……………」

しかし、教室の中は変な緊張感に溢れていて、返事は帰ってこない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

うるたえる山田先生が可愛そうなので、一夏は自分だけでも反応

するべきかと考える。しかし、ここでスベったら、ただ一人を除いて全員女子のこの教室で、変なキャラクターを作られてしまう。そこまで考えると、一夏は耳元で自分を呼ぶ声に気づいた。

「織斑君！ 織斑君！」

「はっ、はいっ！！」

必死になって自分の名を呼ぶ山田先生に、思わず大声で生返事をする一夏。

ガタリと椅子から立ち上がると、クラス中からクスクスと笑いが起こる。

「お、大声出してごめんね。でも、あ、から始まって、今、おなんだよね。だから、自己紹介してくれないかな？ 駄目かな？」

「い、いや、そんなに謝らなくても……っっていうか、自己紹介しますから、落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？ じゃあ早速お願いしますね」

そこまで会話が続けると、一夏は立ち上がったまま後ろを向く。女子達の視線が痛い。なんせ、先ほどまで視線をそらしていた筈でさえ、横目で一夏を見ているのだから。

しかし、ここまで注目されては自己紹介しないわけにもいかず、

一夏はさっさと喋り始めた。

「え、えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

一夏はぺこりと頭をさげ、上げる。しかし、女子達の「もっと何かないの？」といった視線に耐えられなかったのか、自然とたじろぐ一夏。

(そんなに喋ることはないが、確かにこれしか喋らないと、無趣味、暗いやつのレッテルをはられてしまっ……こうなったら!」

静かに一夏の頬を伝う汗。息を大きく吸っては吐く一夏を見て、自然とそこにいる者達は息を呑んでその様子を見守っていた。

そして、覚悟を決めたのか、先ほどまで閉じていた瞳を開く。そして再び大きく息を吸った一夏は……

「以上です!!」

見事にスベった。緊迫した空気は一気に緩み、思いつきりこける女子多数。

(あれ? 俺、何かミスった?)

いやさ、確かに今のは不意打ちだったかもしれないけど、そこまで期待すんなよ。

一夏は思いつきりそう思ったが、次の瞬間、そんな考えも一気に吹き飛んだ。

ガンツ!

「痛ッ

!?!」

一夏の脳天真上に直撃する拳。あまりの痛みにも、一夏は声をあげて、おそろおそろ拳のほうを見た。

そこに居たのは、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身など……要するに、そこにいたのは、

「げえっ！ 関羽！？」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

パァンッ！

本日二度目の殴打、頂きました。ちなみに、とてつもないダメー
ジだ。

その大きな音に、何人かの女子の顔がひきつるほど。

ちなみに、もう一人の男子のほうは、興味深そうに一夏のやりと
りを見ていた。

(それにしても、このトーン低めの声に、この叩き方は……まさか)

「あ、織斑先生。会議はもう終わったんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けて悪かったな」

「いえ、副担任ですから、これくらいは……」

先ほどの一夏への言葉とは打って変わった優しい声。

しかし、これで確信した。この人は

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にするのが仕事だ。私の言う事はよく聴き、理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私のいうことは聞け、いいな」

なんとという暴力発言。しかし、これで一夏の確信は、これで証明された。

織斑千冬。俺、織斑一夏の実の姉にして、育ての親。

なんて格好つけた思考を巡らせる一夏だったが、そんな考えさえも、次の女子達の咆哮で掻き消されることになる。

「キヤーーーーーー！　千冬様、本物の千冬様よっ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまにあこがれてこの学園に来たんです！　北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

次々に騒ぎ出す女子達。対する千冬姉はうつとおしそうな顔で

「毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。私のクラスにだけ集中させているのか？」

と、小さく呟く。

これが心の底から言ったことだから、ここまでクラスはもりあがるのだ。千冬のちよっとした呟きで、クラスはさらに盛り上がった。

少しして落ち着いたクラスを確認すると、千冬姉は再び言葉を発した。

「さてと、邪魔してしまっただが、自己紹介を続けてくれ」

そうして、また次々と自己紹介が始まる。しかし、俺の関心を引きくのは、もう一人の男子の言葉だけだった。

「南部、響介だ。少し前までアメリカ軍に居た……これから一年、よろしく頼む」

その口どりは、本物の軍人のもの。それに、制服の合間合間に見える腕からも、鍛え上げられた筋肉が見え、その威風堂々たる姿に、ざわめきを見せていた女子達も、自然と静かになっていた。

「駄目だ……全然ついていけねえ……完全にギブだ……」

現時刻は、一時間目のIS理論終了後の、休み時間。

オレこと織斑一夏は、授業内容にまったくついていけず、机につぶくして一人うなだれていた。

しかし、オレとあの、南部って奴以外全員女子というのは、ここまで辛いものなのか。この世界的大ニユースは当然色んなところへ出回っているらしく、視線や噂話ばかり感じる……。

しかも、嫌なのは誰も話しかけず、ひそひそ話してるだけってことなんだよな。フレンドリーに話しかけてきたりする人ならまだ分かる。でも、流石に「あなた話しかけなさいよ」「私行っちゃおうかな」とか、オレに聞こえるくらいの声量で話されたら、嫌でも視線が気になる。

「はあ……なんとかならねえかな」

そう、小さく呟いた時だった。

いきなりクラスのざわめきが強まった……というより、話し声が大きくなったのだろうか。一気にあたりの女子達が騒ぎ出した。

オレだって人間。そうなったら気になってしまふのはしょうがないことで、机から体を起こして振り向く。

するとどうだろうか。百聞は一見にしかず、皆が騒ぎ出した理由がすぐに分かった。南部に、一人の女性が話しかけたのだ。

その女性は、綺麗な色の金髪を後ろに束ねており、腕を軽く組んでふふんと鼻で笑い、南部に声をかける。

「響介、なにぶすーつとしちゃってるのよ。唯一の友達と話したいとか思わないわけえ？」

「知るか、一人でやってる。……それに、オレはこの視線に耐えられるほどタフじゃない」

「ええー？ むしろ、もつと見せ付けちゃえーってならないわけ？」

響介つてば、今有名人なんだから」

「興味がないな。それに、オレがISを動かしてここに入れられたことや、オレが有名人だということ事態、まだ実感が沸かん」

「あらら。いつも通りねえ」

会話の内容から推測すると、二人はそれなりに話せる関係みたいだ。それに、あいつもオレみたいに、無理やり入れられたってことなのかな。可哀想に。

「……ちよつといいか」

「え？」

そうしてじつと後ろを眺めていると、いきなり誰かに話しかけられた。驚ろいたせいか生返事をしてしまい、軽く動揺しながら、オレは振り向く。

「……箒？」

そう、オレに話しかけてきたのは、六年ぶりに再会した幼馴染、篠ノ之箒だった。

第一話 入学、IS学園！（後書き）

前書きで言いたい事全部言ったので、次回の予定、その他を書いております。

まず、次回の更新日。今週中にあげる予定です。

無理だったら来週の月くらいに。

それと、すごく大切なこと。自分の原作知識です。

IS原作は、1、2、6巻だけという、見事な穴空きです。アニメは全部見えます。

OGは、アニメ全て、GBA版OG1、OG2はやってますが、2、5は未プレイです。ある程度の知識はありますが。

まあよつするに、原作もあまり詳しくないですよ、ということですよ。

それではここまで読んでくださった方々、ありがとうございました！

第二話 二人目の例外（前書き）

今回はちょっとハイペースです。OGキャラを早く出したいという
こともあり、台詞多めで物語を進行させていきます。

手抜いてるだけだろ？ ってのは禁句でw

後、感想で「誰々は出さないの？」とか遠慮なく言ってください。
キャラを忘れちゃうと困るので。

というより、この世界でSRXをどうするかまだ考案中なので、
もう少し先にはなりそうですが。

第二話 二人目の例外

目の前に居たのは、6年ぶりに再会を果たした幼馴染、篠ノ之箒だった。

箒は、オレが昔、というか小学生の時に通っていた剣道場の子。肩下まで伸びる黒髪ポニーテールと、本人曰く「生まれつき」の少し不機嫌そうな目つきが特徴的だ。

いや、単にオレが嫌われてるだけってのも有り得るな。実際、今箒を名前で呼んだら睨まれたのは、気のせいじゃないはず。

「廊下でいいか？」

ここでは話にくい事なのか。はたまた、他の人には聞かれたくない話なのか。まあオレとしてはどちらでもいいんだが、この状況から抜け出せるのは非常に助かる。

「早くしろ」

「お、おう。悪いな」

箒はオレが何か返事をする前にすたすたと廊下へ出て行ってしまふ。同じように、椅子から立ち上がったオレも箒についていくのだが……そこに集まっていた女子達がざあっと道を開ける光景が、何か凄かった。

それで廊下に出るは出たんだが、周囲を囲む女子が散開することはずに、オレ達を囲んで聞き耳をたてている。これじゃあ廊下と変わらないじゃないか。

「あ、そういえば」

「何だ？」

ふと思い出したことがあって、自分から話題を振る。というのも、廊下で呼んでおいて筭が自分から喋ろうとしないからなんだけど。

「去年、剣道の全国大会優勝したってな。おめでとう」

そう褒めてやると、筭は口をへの字にして顔を赤らめた。いやいや、怒らないでくれよ。

褒めただけなのに怒られて、全国優勝レベルの太刀を食らうなんてごめんだ。

「……なんでそんなこと知ってるんだ」

「新聞で見たから」

「何で新聞なんて見てるんだっ……」

何を言ってるんだ、筭は。あ、もしかして、オレには知られたいなかったのかな？

もしそうだとしても、オレが自由に新聞を読む権利くらいは認めしてほしいけど。

それにしても筭は変わってないな。見た目から、ちょっと男というか、侍っぽい喋り方で、全部。

知ってるか？ 懐かしむ心って、意外と大事なんだぜ。

「あー、後」

「な、何だ？」

「……久しぶり。六年ぶりだったけど、筭ってすぐに分かったぞ」

「え……」

「ほら、髪型も同じだし」

そういつてやると、箒はまた顔を赤らめて、指先で自分のポニテールを弄りだした。

「よ、よくも覚えてるものだな……」

「そりゃ覚えてるだろ、幼馴染のことくらい」

オレがそこまで言うと、タイミングがいいのか悪いのか、二時間目開始のチャイムが鳴り響いた。

それと同時に、オレ達を囲んでいた女子達も自然と教室へ戻っていく。この切り替えの速さは、流石にエリート校ってことなのかな。

「オレ達も戻ろうぜ」

「わ、分かっている」

ぶいっとオレから顔をそらしてそう答える箒。あれ？ オレ、何か悪いこと言ったかな？

そうして、またすぐに教室へ歩き出す箒。オレを待つてはくれないのか。

さてと、オレの後ろに立つ千冬姉のオーラが怖いから、オレも早く席につこうかな。

やばい。本日二度目のギブアップだ。

現時刻は二時間目開始から20分ほど後。オレはまたしても心の中でギブアップを宣言し、机につつぶくしていた。

黒板の前には、教科書に書かれていることをすらすら読み上げる山田先生。その山田先生の授業に、時に頷きながらノートをとって

いく女子達。そして、反対にまったくついていけずに困り果てるオシ。

しかし……これはマズイな。普通の授業ならそこそこついていける自信はあったのだが、ISの勉強はまったくしたことがなかったオレだ。机につまれた教科書をめくってみるも、オレには意味不明の単語にしか見えない。

そうだな、例えるなら、アメリカ人がいきなりイギリス英語で書かれた本を読み始めた感じだな。うん、自分でも考えてることがまったく分からない。

それにしても、IS学園に入る人は事前学習してるって本当なんだな、と、改めて痛感した。入学当時は「大丈夫か？ この学校」なんて思ったりしたが、こうしてみると立派なエリート校だ、ホント。

（エリートには興味ないが、これは要勉強だな。千冬姉にこれ以上怒られたくもないし）

頭の中で変な覚悟を決めると、山田先生がこちらを見ていた。もしかして、オレの状況を察して助けようとしてくれるのかな。

「織斑君、分からないところはありますか？」

「え、えっと……」

もう一度。もう一度だけ、手元の教科書に視線を落とし、次は黒板を見る。うん、全部分からん。

「分からないところがあったら聞いてくださいね。何せ、私は先生ですから！」

小さい子供が意地をはるかの如く、山田先生は胸を張る。

やっぱり、人は見た目で判断しちゃいけないな。さつきも教科書をスラスラ読んでたし、普通に頼れる先生なのかもしれない。

「先生！」

「はい、織斑君！」

この気合の籠った名指し。やっぱり、この人は頼れる。オレは勝手にそう確信し、自分の気持ちというか、状況をストレートに伝えた。

「ほとんど全部分かりません」

「え……ぜ、全部、ですか？」

あれ？ 自分の気持ちを素直に言ったほうが受け入れられると思っただのに。

山田先生はいかにも「困ります」といった表情でうろたえている。

「え、えつと、今の段階で、織斑君以外に分からないところがある人は居ますか？」

シーン。そんな擬音が聞こえそうなほどに、教室は静まり返っている。

どうした皆！ 聞くは一時の恥じ、聞かぬは一生の恥だぞ！ ここで聞いておくべきなんだ！

「……織斑。入学前に渡した参考書は読んだか？」

教室の端からこのやり取りを見ていた千冬姉がオレに疑問をぶつける。もしかして、助けてくれるんだらうか。さすがはオレの姉！ ここは正直に答えよう。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！

本日三度目の殴打。普通の出席簿で叩かれてるだけなのに、何故ここまで痛いのだろうか。

「必読と書いてあっただろうが、馬鹿者。後で再発行してやるから、一週間以内に覚える、いいな？」

「……はい。分かりました」

あの分厚さを一週間はむちゃくちゃな気がするけど、千冬姉の目つきが怖いから素直に従う。

その目つきは反則だぞ、千冬姉。悪魔ですら払いのける威力だ、うん。

23

「ちょっとよろしくて？」

「へ？」

二時間目も無事には言えないが終わり、現在は休み時間。さっさと復習して少しでも授業についていこうと考えていたオレはいきなり声をかけられ、素っ頓狂な声を出した。

話しかけてきた相手は、綺麗な金髪に、鮮やかなブルーの瞳を持つ女子。いや、女子なのは当たり前か。

髪先端がちょっとロール状になってるところに、何気ない気品を感じる。どこかの貴族なのか？

それにしても、その雰囲気は、最近の女子を象徴した感じだよな。

ISのせいで「女」偉い」の構図が出来上がってしまったてる。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。悪い。それで、どんな用件だ？」

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも幸運なので、それ相応の態度というものが……」

なんだ、返事は？ って聞いてきたから返事しただけなのに、ぐちぐち語り始めた。

正直、オレはこんな人間は苦手だ。ISを与えられて、ちよつと女性が優遇され始めたからって、調子に乗ってその力を振りかざす。そんなものはただの暴力だ。学校でよくある苛めとかと、なんら変わらない。

「悪いな。オレ、君が誰だか知らないし」

実際、知らないのは事実だし。

自己紹介で今みたいにくちぐち語ってたから印象には残っているものの、恭介の存在や、千冬姉が担任だったことが全然シヨックは大きかった。

しかし、この答え方はどうも目の前のこの女子の気に障ったようで……面倒な女子に絡まれちゃったな、はあ。

「わたくしを知らない？ このイギリス代表候補生、セシリア・オルコットを？ 入試主席のこのわたくしを？」

名前、セシリアっていうのか。それにしても代表候補生か……それは凄いな。まあ、代表候補生が凄いつついうのも、今復習を始めたこの教科書のページに書いてあって、今覚えただけなんだけど。

「へえ。そいつは凄いな。それと聞きたいことがあるんだがいいか？」

「ふん、下々の者の要求にこたえるのも貴族の務めですから、構いませんわよ」

「じゃあ聞くけど、入試つてあれだろ？ IS動かして戦うやつ」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれで得点一位つて、どういうことだ？ 倒すだけならオレでも出来たし」

「な……」

あれ？ オレ、何か変なこと言ったか？

セシリアはオレの言葉に顔を引きつらせてる。もしかして、見返せたかな？

まあ倒したといつても、あれを倒したと言っていいのか疑問だけど。突っ込んできた教官を避けたら、そのまま壁にぶつかって教官が動かなくなっただけ。

しかし、オレの言葉に相当ショックを受けたのか、セシリアは顔をひきつらせたまま、オレに尋ねてきた。

「わ、わたくしと、後もう一人の女子だけと聞きましたか？」

「女子では、つてオチじゃないのか？ あっちにいる南部も倒したみたいだし、それに、二人居るならその時点で主席とも言えないと思うんだが」

オレは正論を述べただけ。悪くない、はず。

しかし、セシリアはどうも分かりにくいやつだ。本気で怒っているのか、こちらに人差し指を立てて、大声で聞いてきた。

「あなた！ あちらの殿方はともかく、あなたも教官を倒したというの！？」

「いや、あつちはともかくって……」

「あちらの方は普通に授業についてきていますわ！」

「お、落ち着けて。な？」

「これが落ち着いて

」

ベストタイミング。ここで休み時間終了のチャイムが鳴った。今のおれには福音に聞こえるね。

「くっ……話の続きはまた後ほど！」

最後に、フンツ、とオレを軽蔑したかのような声を出し、自分の席へと戻っていくセシリア。いやあ、本当に助かった。

そして全員が席につくと、千冬姉が教壇の前に立った。次の授業は千冬姉が担当なのかな？

「それではまず授業の前に、クラス代表を決めておく。まあ、学級代表のようなものだな。主な仕事はクラス対抗戦への参加と、生徒会への出席だ。ちなみにクラス代表は恐らく決まってしまうと一年間変更できない。推薦、又は立候補する者は居ないか」

ざわざわとクラスが色めきだつ。まあ、オレには関係ないだろうな。

「私は織斑君を推薦します！」

「お、オレエ!？」

ちよつと待ってくれ。いくらオレが珍しいからって、クラス代表までやらせるのは間違ってると思うぞ、うん。

「はあい、織斑センス。私は響介を推薦します」

一時間目の間での休み時間で恭介と話していた金髪の子が手をあげ、軽い口調で恭介を推薦する。やっぱり知り合いなんだろうか。そして、肝心の響介は目を閉じて、頬杖について沈黙。肝が据わってるな、うん。

「では、候補者は織斑と南部……他には居ないか？ 居ないなら、この二人のどちらかにするぞ」
「納得が行きませんわ！！」

千冬姉の言葉に、机を思いっきり叩いて立ち上がったのは、先ほどまでオレに色々言ってきたセシリアだった。もしかして変わってくれるのかな。もしそうだったら有り難い。人とは仲良くしておくものだな。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表なんて、いい恥じさらしですわ。このセシリア・オルコットに、そのような屈辱を一年間味わえと！？」

「そうだ、もつといったれセシリア！ ……あれ、これって普通にけなされてるだけだよな？」

「いいですか！？ クラス代表とは、実力トップがなるべき。そしてそれは、この私ですわ！！」

なんだ、普通にけなししてるだけじゃん。そうまでしてクラス代表になりたいなら勝手になればいいとオレは思うが、男だからだとか、そういうのは気に入らない。流石に言い返したくなってくる。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自

体、このわたくしには耐え難い苦痛で……」

うん、もう我慢できないな。

「イギリスだつてたいしたお国自慢はないだろ。世界一マズイ料理で、何年覇者だよ」

「なっ……！？ あ、あなたねえ、わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「先に侮辱したのはお前だ。それくらい理解してから物を言え」

……ん？

ここにきてオレの変わりに事を言い出したのは、先ほどまで黙っていた響介。なんていうか、色んな意味で強そうだな。

「……ッ！ 決闘ですわー！」

唇をかみ締め、再び机を叩いて宣言するセシリア。こらこら、物は大切にしなさい。

しかし、先ほどまでのオレへの怒りはどこへいったのか、それとも先の言葉でそのまま持っていかれたのか、今のセシリアの怒りの矛先は、どうやら響介に向いてるようだった。

「いいだろう。代表候補生にオレが勝てるかどうかは怪しいところだが、分の悪い賭けは嫌いじゃない」

……これは凄い。同姓のオレですら格好良くて見られるほどだ。でも、オレは決してホモじゃあない。

「さて、話はまとまったな。では一週間後の月曜日、放課後、第3アリーナで勝負を許可する。各自、準備しておくように。それでは

授業に移るぞ」

こうして、響介とセシリアのクラス代表決定権を賭けた戦いが始まることになった。

第二話 二人目の例外（後書き）

今回もES成分が高いですね。キョウスケにスポットライトを当ててはいますが。

ではでは、ここまで読んでくださった方々ありがとうございました！

第三話 響介との接触（前書き）

今回はキヨウスケの出番が多いです。キヨウスケの格好よさとか、上手く表現出来ない……キャラ崩壊してないですかね？

第三話 響介との接触

響介とセシリアの決闘が決まった後、何事も無かったかのように授業は進んだ。

千冬姉もあれ以上事には触れなかったし、セシリアも落ち着いたのか、オレ達に声をかけることも無かった。

そんな調子で、今は同日の昼飯時なのだが……なんと素晴らしいことか。IS学園は全寮制だから当たり前なのかもしれないけど、食堂があつて、しかもその料理が滅茶苦茶上手い。

ちなみに、オレのメニューは日替わり定食。今日はサンマの塩焼きとご飯に味噌汁。和の象徴だな。

「……………」

でも、この空気だけはなんとかしてほしいと思う。

オレの隣では、箒がオレと同じく日替わり定食を食べているのだが、何があつたのかまつたく口を開かない。

黙々と食事を食べ続けること約5分ほど。状況に変化が訪れた。

「あ、織斑君、ここに居たんですね」

「はい？」

突然名前を呼ばれたので振り向いてみると、山田先生が書類を片手に持って立っていた。

「えつとですね、織斑君の寮の部屋が決まりました」

そう言って鍵と何か書かれた紙を差し出してくる山田先生。渡された紙を見ると、部屋番号が書かれているようだ。「102

5室」とだけ書かれている。

それにしても、何かこう、寮生活って何かワクワクするものがあるよな。友達とどっかに泊まるとか、すっげえ楽しみじゃん。まあIS学園には女しか居ないからちよつとアレだけど。

ちなみに、IS学園が全寮制なのは、将来有望なIS操縦者を保護するのが目的らしい。まあ、現存する兵器の中でも最強なISと、それを操縦する人間が居たら、政府とかも保護したくなるだろうし、当然っちゃ当然か。

何せ、ISは今のところ全世界で467機しかないんだからな。各国に割り振られたコアを研究するしかないらしい。

「俺の部屋、決まってないんじゃないですか？ 聞いた話じゃ、一週間は自宅から通学することになってたみたいですけど」

「そうなんですけど、事情も事情なので、急遽部屋割りを変更することになったんです。……織斑君、そのあたりは政府から聞いてますか？」

最後のほうは俺にだけ聞こえるように耳打ちしてきた。

実際そんな事は聞いてないけど、当たり前かとは思つ。だってアレだぜ？ 俺つて一応、「世界でたった二人の男性IS操縦者」な訳で、ニュースとかでも報道されて相当有名になったんだし。

有名人が歩いてたら声をかけなくなるのは普通だと思うけど、これは街中を歩く有名人の気持ちが一番に良く分かる。しかも俺の場合は自宅まで押しかけてくる研究者も居るんだ。寮のほうは正直有り難いな。

「まあそういうわけで、政府特命もあつて、寮に入れるのを優先したみたいですよ。相部屋ですが、一ヶ月もすれば個別の部屋に移動できるの、それまで我慢してくださいね」

「それは分かりましたけど……荷物のこともあるんで、一回帰って

いいですかね？」

「あ、それなら」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

いつから話を聞いていたのか、千冬姉が乱入してくる。まあ、確かに有り難いし、タイミングも結構いいんだけど。

「ど、どうも有難うございます」

「まあ、生活必需品だけだがな。お前の場合、着替えと携帯の充電器だけで十分だろう」

いや、実際そうだけど、すっごい大雑把だな。凄い強くて人気なイメージがある千冬姉だけど、実際に家事はほとんど出来ないからこんなものなのかもな。

「じゃあ、時間を見て適当に部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時くらいにまたここでとってください。後、部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。ですが、今のところ、織斑君と南部君は使えません」

「え、なんでですか？」

いや、大浴場使えないのは割と本気で困る。オレは風呂が大好きなんだ。

「アホかお前は。同年代の女子と一緒に入りたいのか？」

「あー……そうだった」

千冬姉の突っ込みで思い出す。そうだな、ここは恭介を除いて、女子しか居ないんだもんな。

「おつ、織斑君、女子と一緒に入りたいんですか！？ 駄目ですよ、そんなの」

「いえ、入りたくないです」

入ったら最後。どうなるか分からないし、論理的にそれは駄目だろ。

しかし、俺の言葉をどう受け取ったのか、山田先生は顔を赤らめてきやあきやあ騒ぎ出す。

「ええつ、織斑君、女の子に興味がないんですか！？ それはそれで問題のような……」

駄目だこいつ、早くなんとかしないと……。

多分本人も頭の中では分かっていると思う。でも、これが中々わざとに見えないから……やっぱり素なのか？ それだったらこの先生、結構問題だぞ。

だって、この発言のせいで、廊下ではすでに「婦女子談義」が開始されてるんだもの。

「織斑君、男にしか興味がないのかしら……」

「それはそれで……いいわね」

「織斑君×南部君……ジュルリ」

頼むからこの状況をなんとかしてくれ。

「えーつと、ここが1025室か」

俺はあの後、直ぐにその場を去って、今はこうして自室の前に居

た。

あの状況になったら逃げるしかないだろ？ 誤解を解く方法があったら是非とも教えてほしいもんだ。

それにしても、山田先生、相部屋って言ってたっけ。まさか女子とじゃないだろうな……。

ゴクリ、と大きく唾を飲む。知らない女子と相部屋だったら寝不足も覚悟だ。

ドアに鍵を差し込む。あれ？ 開いてる。
扉を押し開け、部屋に入る。

まず目に入ったのは、二つの大きなベット。そしてそこに横たわる響介の姿だった。

ほっと胸を撫で下ろして、ため息をつく。

(マジで知らない女子と一緒にじゃなくて良かった……)

そこまで考えて、もう一度安堵のため息をつくと、恭介がこちらに声をかけてきた。

「お前は……織斑一夏といったか。まさか、お前が俺の同居人、ということなのか？」

「ああ、そうみたいだぜ……よろしく、南部さん」

俺は何故か大人びた雰囲気を持たせようとした。たまたま、南部さんと返してしまっただけ。すると、恭介はふっと笑みを漏らし、もう一度声をかけてきた。

「フツ、響介でいい。同室ということもあるが、オレ達は同じ穴のムジナだ。これからよろしく頼む」

「あ、ああ……こちらこそよろしく、恭介」

やっぱり、響介ってなんか、大人だよな。色んな意味で。いくら騒がれてもそこまで気にしてなかったし。

恐ろしいほど肝が据わってるっていうか、なんていうか。

「それで、響介。一つ聞きたいんだけどさ、なんでお前はこんなところに入れられたんだ？」

「その事が……本当にあれは驚いたな。いいだろう、説明してやる。まず、オレは自己紹介の時に、以前はアメリカ軍に居たと言ったな。そこでも当然ISの研究が進められていて、そこでは『ゲシユペンスト』という量産期の開発がされていてな。武装面が乏しかったことと、コストの面で没となったが、それを諦めきれずに、ある博士がゲシユペンストの改造機、『アルトアイゼン』を作り出した。しかしその、『アルトアイゼン』の加速は凄まじく、Gに耐え切れず嘔吐を繰り返す者も居た。それで使いこなせる者がおらずにお蔵入りとなっていたのだが……偶然それをオレが動かし、丁度攻めてきた戦車共を一掃してしまっただけ。ここに入れられた」

響介の話は少し長かったが、大体流れは把握出来た。要するに、
「誰にも使いこなせずに解体されかけたISを使いこなせるものが居て、しかもそれが男子だったからさっさと特集してIS学園に入れちまおう」って事。だと思っただけ。

「そういうお前は何故ここへ入れられたんだ？」

「え、俺か？俺はだな……」

俺は、初めてISを動かした時の事を思い出す。確かあれは二月になったばかりの頃だったっけな。

「俺さ、高校受験で、藍越学園ってとこ受けたんだよ。それで、試験会場があまりに広くて迷っちゃってさ……それでたまたま開けた

部屋の中にISがあつて、触ったら動いちゃつたから入れられた、
つて感じたな」

「それでこんな状況になつたという訳か。お前も大変なのだな」

「ああ……でも、男一人じゃ厳しいし、お前が居ただけでも助かつたよ、響介」

「フツ、それは同感だな」

短い会話。たったこれだけしかまだ響介とは喋っていないが、何か打ち解けてきた気がした。

だが、話を聞く限りでは、響介もそんなにISに慣れてない気がしてくる。本当にセシリアに勝てるのだろうか。

それが心配で響介に尋ねてみると、響介はこう答えた。

「やるしかないなら、やるだけだ。分の悪い賭けは、嫌いじゃない」

第三話 響介との接触（後書き）

「すいません、今回結構短いです。」

キヨウスケのキャラが崩壊したら、どうかご指摘ください（汗）
最近スパロボやってないので、キヨウスケの性格が曖昧です。

第四話 決闘終了（前書き）

更新が大幅に遅れてすいません。この小説のデータのほとんどが消えてました。

現在復興中ですが、先に書き上げた第四話を先にあげておきます。

それにしても、視点変えていいのかったのと三人称難しい、という問題が……。

第四話 決闘終了

響介の事情やら何やらを聞いてから数時間後。夜飯時となっていたので、俺は響介と篤を誘って食堂へ向かっていた。

ちなみに、道中で二人共自己紹介を終えてたりする。とはいえ、俺が篤に無理やりさせたから篤はふくれてるんだが。

まあ、二人共そこそ仲良いからいいかな！

という訳で、食堂に着く。現在、時刻は6：30……外国の人も多いけど、時差ボケとかしてないのかなあ。

そんなどうでもいいことに思考をよせながらも、俺たちはさつさと食券を購入する。篤と俺が日替わりランチで、響介はアフリカの『パニ』という料理らしい。詳しくは知らんけど、軽めで栄養価が高いらしい。

食事を受け取ったら、さつさと空いてる席をとる。4人まで座れるテーブルだ。

そこで食事を取り始める訳なんだが……予期せぬお客が来たよ。予期せぬお客。

「はあい、響介。ご一緒しない？ ……あら、もう一人の男子のほうも居るのね。ハロー」

「は、はあ」
「……」

金髪の女性が話しかけてきた。この人って確か、休み時間に響介と話をした人で……確か、自己紹介でアメリカの代表候補生って言うってたっけ。今日の俺の記憶は冴えてるな。

で、その女性は響介に「エクセレン、自己紹介くらいはしろ」って怒られて、互いに自己紹介した訳なんだが……エクセレンと話していると簿がすっごい怖い目でこっちを見てくる。なんでだろう？ そしたらそしたでエクセレンが簿に耳打ち。くくが好きなのとかが言ってたような気がするが良く聞こえん。それを聞いた簿は顔を真っ赤にしてそそくさと立ち去ってしまうし。

結論：エクセレンに関わると結構振り回されて疲れる。これだけだよ、もう。

「ところで一夏君、来週にあのセシリアちゃんと響介が対戦するけどさ、どう？ 許可は貰ったから、その後に私と模擬戦しない？」

「え？ それってどういうことだ？」

「だって、響介は相手してくれないし、男でISを使える貴方の実力も知りたいし、ね？」

「俺に何かを期待されても困るんだが……」

まあ、こうしてエクセレンと模擬戦をすることになってしまった。

後日、千冬姉に訓練機の使用を頼んだら、俺は特例だから専用ISを渡すって言われた。対戦当日に届くらしい。

しかし、俺は完全IS初心者、相手は代表候補生。ハッキリ言って、何も出来ずに負ける可能性のほうが多い。なので簿と響介に何か教えてもらえないか頼んだところ、剣術を簿、授業の復習等を響介と一緒にしてくれることになった。時々エクセレンが乱入してくるが……多分、問題ない。

そんなこんなで決闘当日。先に試合をする響介とセシリアはアリーナに向かい、俺とエクセレンは千冬姉達教員と一緒にモニター室で試合を観戦することにした。

そこで、俺は最もな疑問をエクセレンにぶつける。

「なあ、エクセレン。響介、勝てると思うか？ 相手は代表候補生だし」

「んー？ ……まあ、今のセシリアちゃんは、相手を見下すっていうか、響介を甘く見てるから……その隙を逃がさない響介じゃないし、五分五分じゃないかしらん？」

最も、セシリアちゃんが冷静だったら、それこそ響介が言うところの、分の悪い賭けになるんだけど」

「そうか……」

エクセレンの話聞いて、ちょっと不安になる。響介には、是非勝ってもらいたい。

そうこう考えてると、セシリアと響介がアリーナの上空へ上がった。

セシリアの身を包む蒼いISは、ブルー・ティアーズという中距離射撃型らしい。それ以上の情報は、一応国家レベルなので説明してくれた千冬姉にも分からないようだった。

対する響介は……普通見るISとはまったく異質の、とても分厚い装甲を持った赤いISだった。

頭部からは角のようなものが生え、右手にはいかつい銃みたいなものがある。両肩についてるタンクみたいなのも、実に重そうだ。『アルトアイゼン』というらしいそれは、どちらかと言うと、コンセプト上は戦車などに近そうな外見だった……。

「最後のチャンスをおあげますわ。今謝るといふなら、痛めつけるレベルをさげてあげてもよろしくつてよ？」

「知らんな。それに、そんなものはチャンスとは言わん。今はただ、目の前に立つ敵を打ち貫くのみだ」

アリーナの上空。セシリアと響介が地味な言い合いをしていた。

というより、響介からしたらそれは軽い挑発でもあった。相手が冷静を欠けば勝機があると考えたからだ。

『それでは二人共、試合を始めてください』

教員である誰かの声のアリーナに響く。試合開始の合図だ。

そして、それと同時に響介は突進 否、奇襲

をかけた。その加速度は凄まじいものであり、一瞬で最高速度に達し……数百mあったセシリアとの距離を、瞬く間につめてしまった。

「ッ……!?!」

その驚異的な速度に驚きをかくせないセシリア。しかし、冷静を欠いた訳ではない。

即座に後退し、響介からの奇襲を避けそうとするが、その加速力に、後退では無意味だと判断する。

そこからのセシリアの行動は早かった。なめらかな曲線を描きながら、自身の武装である、『スターライトmk?』を展開し、響介へと銃口を向け、撃つ。発射されたエネルギー弾は、正確に標的である響介へと襲い掛かっていた。

それを確認した響介は空中でその加速を一気に止め、また別の方向へ加速して避ける。

そして、そのやり取りを何度か繰り返す。接近が難しいと判断したのか、響介は左手の先についた銃口をセシリアに向けた。

「射撃は苦手なんだがな……四の五の言ってられんか」

そこから発射されたのは、『3連マシんキャノン』と呼ばれる、実弾だった。

それを数発発射し、響介は再びセシリアに向かって加速する。3連マシんキャノンが自身の体を上手く隠しているので、スターライトmk?も標準が定まらなくなり、セシリアはそれに苛立ちを覚えた。

そして、ついにセシリアと響介の距離は数十mを切る。後もう一步踏み込めば届く、という距離なのだ……

「フフツ、残念でしたわね。観察力がまだ甘いのではなくて？」
「何……？ ツー!？」

直後、背後からの強い衝撃が響介を襲った。

瞬時に振り向くと、そこには数機の青いビットが舞っていて、そこから射撃されたのか、内一機のビットから煙が出ている。

(仕方ない……まずはあれを潰すか)

そのビットが余程邪魔に感じたのか。響介は一気にビットへ加速した。

響介を後退させるべく、再びビットからビームが放たれる。しかし、響介はそれを避けようとはせずに、わざと食らっていった。

「なっ……馬鹿ですよ!？」

さすがのセシリアもそれは予想外だったのか、声を張り上げる。しかし、即座にハイパーセンサーが危険信号を出した為、セシリアが焦ったのも、その数秒だけだった。

……見れば、数機の並んでいたビットが二つに割れている。一体何が起きたのか。しかし、その答えはすぐに分かった。

何故なら、ビットの向こう側に、頭部の角を光らせた響介が居て、わざわざ説明らしきことを呟いていたのが、センサーによって流されたから。

「シールドエネルギーを多少使ってしまうが……切れ味は一級品だぞ」と。

「フフ……フフフ……」

同じように木っ端微塵にされるビットを見て、何故か、セシリアが不気味な笑みを浮かべた。

怪しく思ったのか。ビットを全機破壊し、セシリアへ奇襲をかけたようにしていた響介は、わざわざ加速をやめ、静止した。

「……何が可笑しい？」

「いえ……なんでもありませんわ」

何でもないならいい。そう思った矢先のことだった。

再び加速を再開した響介だったが、セシリアのISの、スカート状のものが外れ、こちらに向かってくるのだ。しかも、ミサイルのように爆発的な加速を見せている為、急停止しても直撃するコース。

「生憎、ビットはまだ残っていましたのよ？」
「クッ……」

二つのビットが、響介に直撃した。

よつに、思われた。

「!?!」

「残念だったな、それはすでに予想済みだ……」

そう、響介はこの二つのビットを上手く回避し、そのまま急停止、ホーミング機能をそなえており、再び襲ってくるビットを3連マシンガンで打ち落とすのだ。

しかも、その回避の方法がもの凄い。

響介はそこで、切り札であるはずの、『スクエア・クレイモア』を真横に打ち出したのだ。両肩に装備されたそれは、一発一発がチタン製の実弾であり、衝撃ももの凄い。

それを使うことで、反動を利用してビットを回避することに成功したのだ。

そして、響介は再び、セシリアをその目に捉え、ブースターを噴かせる。

遂に取った零距离。ここで響介は、右手をセシリアの腹部に突き刺す。すると、突然、その部分が大きな爆発を起こし、セシリアのシールドエネルギーを大きく削った。

『リボルビング・ステーク』。そう呼ばれる、パイルバンカーのようなものだ。

右手に付く針を相手に刺し、爆破する。そんな単純で原始的な武装。

「終わりだ……！」

「……わたくしの、負け、ですね……」

ステーキの次弾が打ち出された時、セシリアのシールドエネルギーは尽きた。

「勝者、南部 響介」

第四話 決闘終了（後書き）

無理やりキヨウスケ勝たせてみました。

アルトの武装等は、また後日、詳しく解説します。

次回、エクセレンVS一夏+（入ったらですが）です。

第五話 騒動（前書き）

考えてみたら、一人称を使ったバトル描写って始めて書いた気がする。

思ったより難しいですね。

とまあ、そんなことよりも一つ報告をば。

実は私、学生なのですが……そろそろ学校のほうが冬休みに入るんです。

しかも、この冬休み、中々暇が少ないです。予定が滅茶苦茶入ってます。

なので、ちょっと冬休み中は更新が遅れることになりそうです。

まあでも、最低週1では書いていこうかなと。

後、プロット等の復興は終わりました。

以上、報告でした。

第五話 騒動

「お疲れ。後おめでとう、響介」

「ああ……だが、奴の油断が無ければ恐らく勝てなかった。流石は代表候補生といったところだな」

「じゃあこれから俺が戦うエクセレンも相当強いってことかよ……」

息を吸い、吐き、呼吸を整えて、気合を入れなおす。息を吸うと腹が凹み、息を吐くと腹が膨れる。

普通ってた篠ノ之道場で習った呼吸法だ。普通に落ち着く。

「それじゃあ、行ってくる」

「ああ……勝ってこい！」

箒と軽い挨拶を交わす。

軽いガッツポーズを組んだ箒から感じる気合に、またまた気合が入ってしまう。やっぱり応援するのは大切なんだな、うん。

そして俺は、先ほど響介とセシリアの対戦中に届いたオレの専用IS、白式に乗り込む。てかこれ、白式っていうか、銀式って感じの色してるよな……。

「悪いが時間がない。初期化と最適化は戦闘中に終わらせる」

千冬姉から実に優しいお言葉をいただきました。

いや、簡単に言うけどさ、初期状態のISで戦うって結構キツイ

ぞ？

昨日復習したところだから分かるんだけど、これって本当に難しい。

何せ、自分に合わないISで戦うんだからな。例えるなら……そうだな、ママチャリを三年間使用して慣れきった人がいきなりマウンテンバイクにのる感じだな。うん、意味わからん。

早速、ISを使ってアリーナ上空へ飛んでみる。イメージし辛くてちょっとフラついてしまったが、なんとか既に浮いてるエクセレンと同じ高度まで移動した。

ちなみに、アリーナは大体野球グラウンドよりちょっと広いが狭いからいの大ささだ。但し、上は滅茶苦茶高い。

観客席の前や上空一定の高さのところには遮断シールドって呼ばれるシールドが張ってあって、攻撃が観客達に届いたりしないようになってる。実に素晴らしい。

後ちなみに、これは何処かのスイッチでレベルを設定できて、レベルを高くすれば高くするほど強い攻撃しても大丈夫になるらしい。

「んじゃま！ 始めましょっか！」

「ああ」

エクセレンの言葉に軽く頷いて答え、早速突撃してみる。

先ほどの響介のアルトほどじゃないけど、これ結構加速力あるよな。凄い凄い。

どんどん速度をあげながら、白式についての武装を確認する。武器がないと戦えないもんな。……は？

(近接ブレードが一本のみってマジかよ……まあ、何も無いよりはマシだなっ！)

瞬時にそのブレードを展開する。軽くそれを振ると、エクセレンが全力で後退し始めた。あっちのISも滅茶苦茶早いな……白いIS。確か、ヴァイスリッターって言ったっけな。

「悪いわね、あんまり近接戦闘は得意じゃないの。でも、射撃はお任せよん！」

そういうと、後退しながらエクセレンは素早く武装を展開した。ちよっと大型のライフルみたいなものだ。

「オクスタン・ランチャーBモード！ んふふ、何処を狙って欲しい？」

こんな時にも軽口を忘れないって凄いことだよな。どうでもいいけど。

エクセレンが軽くあのランチャーのスイッチを押すと、かなりの速度で実弾が飛び出してきた。しかし、動きは一直線なものなので結構簡単に避ける。

そして再び剣を構えると、二弾目が飛んできた。当然避けたが……このままでは近づけないな。

どうやったら近づいて一発切り込めるか。それを脳内で考える。思い出せ、今まで復習してきたことを、剣道で学んだことを……。

そうして思い出す、一つの策。実際これは相当危ないことなのだが……この剣が一撃必殺の威力ならば、ほぼ確実に勝てると思う。でも、失敗すれば負けどころじゃなく、怪我だって当たり前の策かもしれない。響介じゃないけど、分の悪い賭けつてところだ。

ところで、今思ったけど、響介って賭け事好きだよな。まあそんなこと考えていられるほどエクセレンは弱くないから、すぐにそんな思考も止まるんだけど。

……よし、行くぞ。

「あらん？ どつたの、坊や？」

「年は同じだろ！？」

やっぱりエクセレンには勝てる気がしないな。違う意味で。

剣を両手でしっかりと持つ。そうして、一直線にエクセレンの方へ加速した。

「あら、これを見逃すお姉さんじゃないわよ？」

エクセレンが再度構えたランチャーを放つ。しかし、俺は避けずに突っ込んだ。

今までの凄い加速で流れていた景色が、加速によって俺の体によってかかっていた重力が、あの実弾の衝撃と煙で吹っ飛んだ。

「お、織斑君……大丈夫なんですかっ！？」

「落ち着け、山田先生」

時を同じくして、モニター室。ここでは、一夏の行動に、大なり小なり全員が驚愕していた。

それも当たり前だ。エクセレンのオクスタンランチャー・Bモードは、距離こそ稼げないが、その分威力は相当ある。それをわざと食らわずに突っ込むのは、無謀この上ない。

しかし、流石に第一回モンドグロッソ優勝者なのか。千冬はほとんど動じずに、山田を宥めていた。

その瞳は力強く、そして同時に、何かを感じ取っているようだった。

た。

「織斑先生、どうかしましたか？」

その、何処か優しくなった雰囲気、響介は問う。

「ふん……あいつは機体に救われた。それだけのことだ」

「そうですか……。ん？」

「どうした、南部……何？」

会話の途中。二人はあることに気づく。

その、驚愕したようで落ち着いた様に、山田はたちまち首を傾げる。そして、二人の目線の先……数あるモニターの中の一つ。そこを見ると、二人が驚愕した意味を理解したのか、声をあげる。

「織斑先生……これはっ!？」

「ああ……一応、政府へ連絡を入れねばな」

そして、山田は急いで政府へと連絡をとる。

響介と千冬の頬には、一滴の冷や汗が流れ出していた

「うおおおおおっ!!」

俺はどうやら賭けに勝ったようだ。

俺の狙い。それは被弾覚悟で突っ込み、一撃入れること。

実弾こそ食らってしまったが、そのダメージは運よく、『最適化』、つまり、一次移行が終わったことにより、帳消し。……なるほど、これで白式はようやく俺の専用機になったってことか。銀色っぽかった装甲は綺麗な白になり、やや滑らかな形になっている。

しかし、ここで攻撃を止めてしまえば作戦が台無しだ。俺は思いっきり叫んで加速した。

すると、握っていた剣が二つに割れ、中からエネルギー刀のようなものが出てきた。白式には、こう記されている。

『ワンオフ・アビリティー、零落^{れいらく}白夜^{びやく} 発動』と。

よくは分からないが、多分威力は先ほどより上だろうそれを、しっかり握りなおす。

「悪いわね、私、良い男には花を持たせる主義だけど、これでも代表候補生だから、これ以上のサービスはあげられないの」

この言葉の意味を、俺は一言言われただけじゃ分からなかった。しかし、数秒後にその意味を痛いほど理解することになる。

「痛ッ!?!」

直後に、凄い衝撃が、俺の真横から襲ってきた。

急いで振り向くと、そちらからは大量のミサイルが俺を捉えていた。

『スプリットミサイル』。多弾頭の牽制用の武器だ。

しかし、いくら牽制用の武器といっても、これだけの数があると流石にシールドエネルギーも減ってくる。

「あらあら、余所見は駄目よん」

その言葉に、急いで再びエクセレンのほうへ振り向く。エクセレンはオクスタンランチャーを構えてこちらに狙いを定めていた。

「オクスタン・ランチャーEモード！ こっちはかなり飛ぶわよ？
逃げられるかしらん？」

「くっ！」

急いで後ろへ振り返って加速するが、オクスタンランチャーEモードという、ビーム兵器が襲ってくる。確かにこちらはBモードとは違うな。いくら逃げてても飛んでくる。

アリーナの遮断シールドすれすれを、曲線を描きながら飛び続ける。すると、あちらの射撃が一旦止まって……今度は、正確に俺のほうを狙ってきた。安定の直撃コースで。

「知ってる？ EモードのEは、E気持ちのEなの」

「知るかあああああー！！」

そうして、俺のシールドエネルギーは尽きてしまった。

「よくやったな、一夏」

「負けちまったけどな……」

試合終了後。モニター室に居た響介に労いの言葉をかけられる。弱冠嫌味に聞こえなくもないが、そこはあえてスルー。

ふと、響介の奥に居る千冬姉を見る。珍しく冷や汗をかいている

ようで、それをちよいちよい拭いていた。

「千冬ね……じゃなかった。どうしたんですか？ 織斑先生」

「お前か。……いや、なんでもない。響介、先ほど言ったこと、貴様ならやれるな？」

「勿論です。それに……久々にあいつらに会えるのも少々楽しみでもあります。では」

声をかけたら半スルー。しかも、ちよつと話をして響介はスタコラサツサとモニター室を去ってしまった。

これは一体どうしたとか。後、どうでもよくはないが、先ほどまでこの部屋に居た山田先生もどこかに消えていた。

「織斑先生、本当に何があつたんですか？」

「そうよ、織斑先生。響介にだけ教えるっていうのは、ちよつとずるいんじゃない？」

気づいたら、エクセレンが俺の肩によりかかって、俺の言葉に賛同していた。いや、何故に気配を隠す？

まあそう聞いても、どうせ驚かせたかったとか、そこらへんだと思うけど。そんなことより、今は千冬姉だ。

「ブラウニングか……そうだな、お前にも行ってもらうか」

「どういうことですか？」

「……学園の周辺で、エアロゲイターの偵察機が確認された」

「先生、それって……っ！？」

「エアロゲイター！？」

これは流石に驚いた。

エアロゲイターといえば、白騎士事件の一年後に確認された、地

球外知的生命体のことである。

現在、ビアン・ゾルダーク博士率いる「DC」によって少しずつ駆除されているようなのだが……ついにこの学園にまで勢力を伸ばしてきたんだな。

「既にヒリュウとATXチームをここに収集し、駆除を行っている」「ATXチーム……ブリット君達ね」

「今回はどうも数が多いようだな。響介は既に向かった。貴様も直ぐに準備して、増援に向かえ」

「大了解よん」

そこまで手短に説明されると、エクセレンは直ぐに走っていつてしまった。

でもやっぱり、こういうのは人数が多いほうがいいよな。

しかも、エアロゲイターは最近世界の軍の一部を次々に攻撃してるとっていうしな。頭数は多いほうがいいだろ。

「千冬姉！ 頼む、俺もそつちを手伝わせてくれ！」

「何を言うか、馬鹿者が」

「え……？」

「これは模擬戦や決闘なんてレベルじゃない。実践だ。軍隊まで来ているのだぞ、そこへ初心者のお前が行けばどうなる？ お前の命が危ないどころか、仲間達の邪魔にすらなるかもしれん」

「……」

千冬姉の言葉に、俺は反論できず、ただ黙って俯き、頷くことしか出来なかった。

第五話 騒動（後書き）

ちよっとキレが悪いかなくなって思ったり。
それにしても、ホントに一人称の戦闘描写になれないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0934z/>

IS ~インフィニットストラトス~ ORIGINAL GENERATION

2011年12月14日20時02分発行